

台湾研修レポート

2015.9.10-9.13

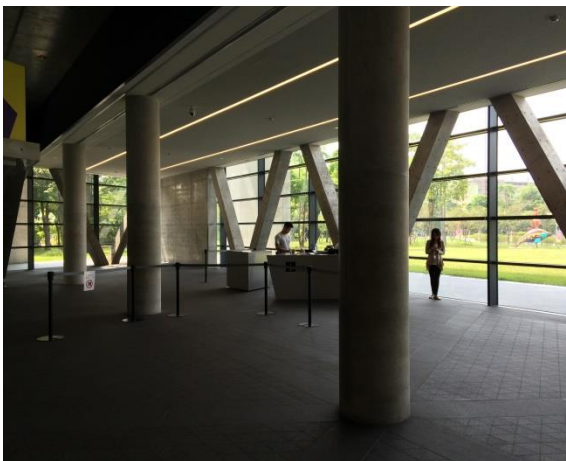
山本 竜太郎

今回、台湾第三の都市で台湾の中部に位置する台中で、アジア現代美術館、旧台中市政庁、メトロポリタンオペラハウスなどを見学した。

道中の台湾の様子は建物や街並みの雰囲気はどこか日本のような印象を受けた。しかし日本の国土の大きさより小さく、人口も少ないが活気が強いと感じた。気候も沖縄との緯度に近いめかかなり熱く感じた。特に街中の様子で驚いたのは外壁同士が接して建物が建っていて、1階部分には公共の歩道下を設けている風景は日本では見られないため新鮮だった。

【アジア現代美術館】

アジア現代美術館（亞洲現代美術館）は台中にあるアジア大学のキャンパスにオーナーが開設した美術館で、日本の有名建築家・安藤忠雄氏が台湾で初めて設計した作品である。亜洲大学の敷地内にあり独特の工法を使ったもので2013年に完成したものだ。大学の副校長の指揮の下、日本の専門家6人が台湾に常駐、準備から完成まで6年半かけらしい。広い敷地に打ちっぱなしコンクリートと三角形構造が前面に出ていて、安藤建築だということを感じさせ、建物自体がひとつの芸術作品のように感じられた。



外観からは三角形の外観がシャープな印象を与え、展示空間としてはなかなか珍しい空間に感じられた。またコンクリートの仕上がりは美しく、全体的に整った空間というのが大きな印象である。

ここは私立大学のオーナーのコレクションであるロダンや19～20世紀の彫刻が中心に展示されている。残念ながら今回は展示を鑑賞できなかったが、いつかは展示も

見たいと思わされた。

また今回、見学した明るいホールに比べて、暗くステージのみを明るく照らした安藤講堂の舞台との対比が印象強く、光の取り入れ方にも安藤建築らしさが感じられる綺麗な建物である。



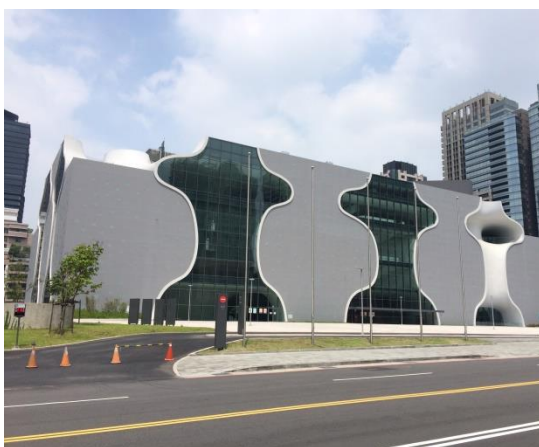
【旧台中市政庁】

旧台中市政庁は白い外観と細部にまでこだわられたディテールが目につく。かつての日本時代に台中州庁だった建物で、白を基調とした荘厳な印象を受けた。現在も市政府の事務所として使われており、日本時代を感じさせる碑や記念物はない。ところどころで日本に見られる建物と特徴が似ており、親近感を感じた。他にもイギリスなどの統治時代もあったことから影響をうけ、いろんな要素が入っ



ているらしいが、うまく組み合わせされた印象である。また市民が乗るレンタルサイクルが近くにあるのも生活の身近なものである感じを受けた。

【メトロポリタンオペラハウス】

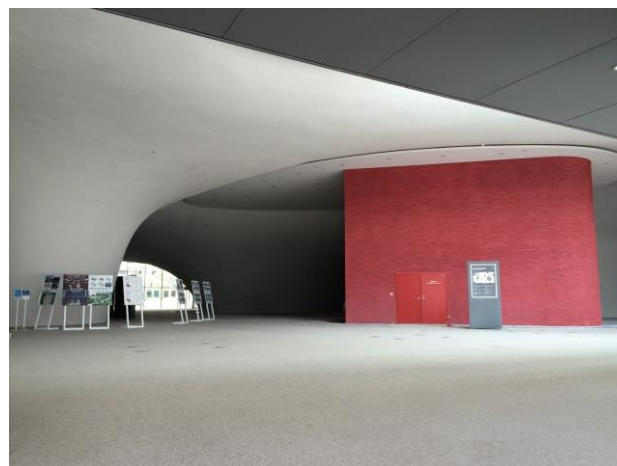


メトロポリタンオペラハウス(国立歌劇

院)は日本の建築家・伊藤豊雄の作品である。湾曲した構造体が並び、粘土で作ったような外観がとても印象的だった。それらの構造体の間にはガラスがあることで、構造体との対比が特異性をより際立たせているように感じられた。中は見学できなかったが、ガラスから見た壁とも天井ともつかない三次元曲面によって生まれる洞窟のような空間は、まるで建物が生きているようであった。遠くから見ると湾曲したものをカットし整った断面のような建物だが、中がこん

なにも自由に造られている空間であることで感動を受けた。

この建築物で伊東豊雄は建築を自然のシステムに近づけ、建築と人間との関係に無限の可能性を与えようとしたらしい。いつかは中も見学し、歩いてみたいと強く感じさせられる空間である。



また敷地外部には実験で用いた構造体がある。メインの建物の一部分を切り取ったような形だが、それだけでも造形的な作品のように感じた。これらが重なることで躍動感溢れる空間が出来ることがなんとも不思議に感じられた。この切り取られた一部のように建物の中には同じ曲面はないらしく、すべてのパーツが違う形をしているので、本当の意味での手づくりと言ってもいい建築であると言われているのも非常に面白く感じられた。

今回の研修旅行ではこれらの建物以外にも日本と台湾との関係の深さが目立つように感じられた。アジアらしい印象からは日本と近いところも持ちながらも、夜市や朝市、公園などで運動をしている人の多さを見ると日本には無い賑やかさがあり、活気溢れる街並みがどこか日本の懐かしい風景なのかもしれない。

また日本人が設計したものも多いらしく鉄道では台中駅、高雄駅などはどれもどこか日本らしくも感じられた。また年配の方は日本語を用いていたなど、昔から日本に親近感を持っていて、アニメや音楽など、日本のポップカルチャーに影響を受ける次世代の台湾人は、親日的の傾向があるらしい。今まで台湾について知らないことが多かったが、これからは歴史や風土を学んだうえで、また建物を見学しに来たいと思った。